



## みんなを幸福にする

庄司薫という作家がいる。ご存知の通り(ご存知か?)、『赤頭巾ちゃん気をつけて』で芥川賞を受賞した日比谷の卒業生(奥様はピアニストの中村紘子さん)だが、その『赤頭巾〜』を実際に読んだ人はいるだろうか?

主人公の薫くんは日比谷高校の3年生。その年、学生運動の影響で東大入試が中止となり、彼は結局どの大学も受験しないことに決めるのだが、そのことを幼なじみの由美に伝えようとする場面を(かなり長くなるが)引用してみよう。

\*

それからぼくは、あいつなら(なにしろ永いつきあいだし)このぼくの決心をすんなり分かるだろうと思っていてもいたにちがいない。何故なら、ぼくはこの大学はやめたなんてことを他の誰かに言ったら、すぐたとえ「ああ、やっぱり東大でなきゃだめなんだな」と一蹴されるに決まっていることをよく知っている。そしてぼくが困るのは、こういう解釈に対して、ぼくはちょっと説明しようがないということなのだ。つまりぼくは、確かに東大法学部へ行こうと決めていたわけだが、それはよくみんなが「ああ、そうか(やっぱり?)」といった受けとり方をするものとは、ほんの少しかもしれないけれどちがうところがあると自分では思っていたわけなんだ。もちろんどう説明したらいいか分からないけれど、たとえばぼくの兄貴たちは二人とも東大法学部で、その沢山の友達たちもぼくはよく知っているのだが、こういう人たちを簡単に「ああ、あれか」(あれのそこにはいやっらしいパワー・エリートでも立身出世主義者でもなんでも入れていいよ)と一括して極め

つけることは、少なくともぼくにはできないように思うわけだ。それに、ぼくは二年生の時、ぼくが特に好きな下の兄貴に、悪名高い法学部は要するに何をやっているのかときいたことがあるけれど、彼はちょっと考えたあとで、「なんでもそうだが、要するにみんなを幸福にするにはどうしたらいいのかを考えてるんだよ。全員がとは言わないが。」とえらく真面目に答えたものだ。そして本を二冊貸してくれたのだが、一冊は法哲学の本、もう一冊はガリ版ずりの思想史の講義プリントで、ぼくはこれには相当にまいてしまっていて夢中で読んだものだ。そしてちょうどそのすぐあとで、ぼくはそのすごい思想史の講義をしている教授に偶然お会いした。

おととしの初夏の夕方ので、ぼくは下の兄貴と二人で銀座を歩いていたのだが、そしたらバッタリその先生に出会ったのだ。先生は「やあ、やあ」なんて言ってぼくたちを気軽にお茶に誘って下さったのだが、それから話が次々とはずんで…(中略)

たとえばぼくは、それまでもいろいろな本を読んだり考えたり、ぼくの好きな下の兄貴なんかを見ながら、(これだけは笑わないで聞いて欲しいのだが)たとえば知性というものは、すごく自由でしなやかで、どこまでもどこまでものびやかに豊かに広がっていくもので、そしてとんだりねたりふざけたり突進したり立ちどまったり、でも結局はなにか大きな大きなやさしさみたいなもの、そして、そのやさしさを支える限りない強さみたいなものを目指していくものじゃないか、といったことを漠然と感じたり…(つづく)